

「仰げば尊し」の復活を



東北厚生年金病院 院長 松野 正紀

ホリエモンのライブドア事件で巷が騒がしい。世の中、市場経済原理主義で、資本主義社会の末期状態を呈しているようである。最近では、小学校でも投資や株取引の仕組みなどのマネー教育が導入され、拝金主義チルドレンを育成している気配がある。

ライブドア事件の実態あるいは発生した背景についてはこれから詳らかにされるはずである。この事件で大きな損失を被った人々がいて、まとまって損害賠償を提訴したりしているが、それらは一握りの拝金主義者達で

ある。そうでない人々にとっては、このホリエモンの事件は生活には全く関係のない、他人の立小便程度の行為である。夜陰に乗じてやればエチケット違反、人前でやれば軽犯罪法違反程度のものである。

この事件で大事なことは、ホリエモンを筆頭とした若い起業家に、謙虚、感謝、ゆかしさなどの人の品位を保つ、教養、たしなみが全く欠けていることである。そして、そのような要素を身につけさせる教育が、わが国の初等教育では極めて疎かにされていることに大きな問題がある。



日本の原風景は何かと問われれば、私はまず第一に、田舎にある古いくすんだ焦げ茶色の木造の校舎と、その前に広がる桜の木に囲まれた狭い校庭を挙げる。映画「二十四の瞳」の舞台になったような学校のたたずまいだ。そこはちょうど卒業式で、巣立っていく生徒達が歌う「仰

げば尊し」が静かに流れている。「蛍の光」ではない。早春の澄んだ空気の中に「仰げば尊し」が聞こえてくる情景である。

昭和の後半まで見られた木造の校舎も、焼失したり、鉄筋に建て替えられたり、最近ではほとんど目にすることがなくなった。それに加えて、卒業式で「仰げば尊し」を聞く機会もめっきり減ってしまった。

いつ頃から歌われなくなったのだろうか。私の子供達も卒業式で歌った記憶がないと言っているのか、かれこれ20年ほど前からということになるだろうか。奇しくも長男はホリエモンと同じ年であり、ホリエモンも「仰げば尊し」を歌わなかった世代の一人ということになる。私の憶い描くわが国の原風景は、すっかり過去のものになってしまった感がある。



「仰げば尊し」の斉唱は、卒業式の定番であった。多少誇張して言えば、恩師を敬うところを



自然に表現する、日本人の品格を示す文化的行事であった。歌われなくなった理由はいろいろあろう。生徒と教師との関係が昔のように、ひたすら慕うといったものでなくなり、“わが師の恩”と高らかに歌う状況ではなくなったのかもしれない。二番の歌詞にある“身を立て名をあげ”が、立身出世の精神を潔しとしない現在の教育方針になじまなくなったのかもしれない。

この曲が初めて登場するのは1884（明治17）年発行の『小学唱歌集第三編』といわれている。作詞、作曲ともに不詳であり、歌詞もやや難解である。私も小、中学校では正確な意味もわからないまま歌っていた記憶がある。ただ、歌っている間、厳かな空気がただよい、穏やかな気分になった印象が強い。しかし、最近の教師、生徒、父兄の間の絆のゆるみの問題に関して、この歌詞が時代錯誤であるという認識についてはいささか異論がある。



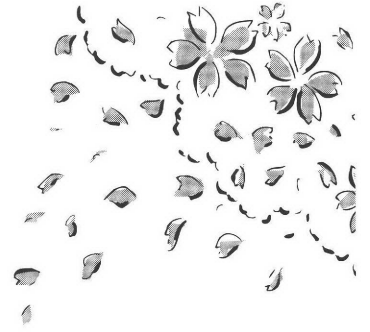
いつ頃からか、学校で運動会の徒競走の着順を決めなくなったり、決めても皆の前で表彰しなくなった。ちょうど、“落ちこぼれ”などという耳ざわりのよくない名詞が現れた時期に一致する。競争は好ましくないという教育方針あるいは下位着順の

者への配慮だったと理解するが、これも「仰げば尊し」を歌わなくなった時期と妙に符合するのではないだろうか。

教育は難しいものである。とくに初等、中等教育は、多感な時期で、より一層の難しさがある。卒業後のこころの成長に大きく影響を及ぼすので極めて大事である。

勉強は不得手だが、走るとめっぽう速い子がいる。字は下手だが透き通るような声で歌う子がいる。人はそれぞれ長所、短所を持っている。悪い点を取り上げてたしなめ叱るのが教育ではない。他人が持っていない良いところを指摘し、褒め讃え、それを伸ばしてやるのが教育だ。徒競走で勝った子には賞品を与え、その能力を皆で讃えてあげたい。自分の隠れた才能を指摘し、褒め讃えてくれる先生からは、悪いところを叱られたとしても生徒は嬉しいと思う。気付かせてくれた自分の長所を生かし、社会に貢献するのが“身を立て、名をあげ”ではないだろうか。

私の部屋に「万象皆師」の額が飾ってある。大学時代の恩師が私のために書いて下さった色紙である。吉川英治は「我れ以外、皆我が師」を座右の銘にしていた。どちらも、人は謙虚になれば、生きていく上で出会う森羅万象に学ぶことができると



いうことを示している。

子供は中学、高校に進むと「反面教師」という言葉を知るようになる。これは、悪い手本となる人物や事柄のことである。反面教師も見習ってはならないことを教える広い意味での「師」なのである。“わが師の恩”の師とは、当然学校の先生のことであるが、その他に親、友人、学校、地元の自然を含めた教育環境すべてと理解したい。



「仰げば尊し」は、卒業生が謙虚になって、指導していただいた先生、友人、父兄、学校関係者に心から感謝しながら、卒業後も志を高く持ち、“やよはげめよ”と自らを奮い立たせる歌詞だ。そして、両親が、子供を教育していただいた教師に感謝して、熱い涙を流す歌なのだ。

子供達に再び卒業式で「仰げば尊し」を歌ってもらいたい。そして日本人の思春期を代表する心の文化を復活させて欲しい。